

令和４年度 府中町立府中南小学校 学校自己評価表

学校教育目標	自分が学ぶ みんなと学ぶ かしこく やさしく たくましく	経営理念 ミッション・ ビジョン	「共育」子ども大人も共に育つ学校・家庭・地域 1 共に学ぶ子ども…自ら学ぶ子・自他を認める子・根気強くチャレンジする子 2 共に育つ教職員…子どもと共に自ら育つ教職員・出会いを大切にする教職員 3 地域と共に育つ学校…自分が好き 友達が好き（児童） 子どもと共に学び合おう（保護者） 学校と共に子どもを育てよう（地域）
--------	---------------------------------	------------------------	---

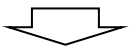
ビジョン（中期経営目標）実現に向けての現状（進捗状況）と今年度の位置付け	不登校等による児童の姿から生徒指導体制の整備を図るとともに，学校とは「学びを通して人をつなぎ共に育つ場である」ことを家庭・地域と再確認しつつ，「命の教育」で教育活動に筋を通す。
--------------------------------------	--

評価計画（中期経営目標を設定して１年目）

A 中期（３年間）経営目標	B 短期（今年度）経営目標	C 目標達成のための方策	D 評価指標	目標値（％）	E 評価結果			
					（ １ ０ ）月		（ ２ ）月	
					達成値 （達成率）	評価	達成値 （達成率）	評価
a 命の教育の充実	・自ら課題を見つけ，解決しようとする児童の育成	・児童の気づきや思いを大切にした命の教育ストーリーの立案 ・自己内対話を取り入れた主体的な学習の充実 ・主体的な学習を促すためのルーブリックを意識した評言	主体的な児童を育てることを意識した評言に取り組む教師の割合	80％以上	91.3 (114)	A	96.6 (120)	A
			他者の意見や考えを受けとめ，自分の考えを表現できる児童の割合	80％以上	96.2 (120)	A	97.7 (122)	A
b 読書活動の推進	・自分から本を選び読書をしようとする児童の育成	・読書祭りなど,委員会活動を中心とした,本や図書室にさらに親しむ活動の設定 ・読書活動を取り入れた単元づくりに関連した並行読書の推進 ・「読書名人」への意欲向上を図るための「リブロカード」の利用	自分から進んで読書ができる「読書名人」の割合	80％以上	85.4 (107)	A	83.3 (104)	A
c 生徒指導体制の確立	・教職員による統一した指導（当たり前文化） ・お互いの違いを認め合う児童の育成	・S S Tの実施（年４回） ・同年齢や異年齢集団による協調的な関わりの場の設定（各学期１回程度以上）	「同年齢や異年齢集団と関わるのが楽しい」と答えた児童の割合	80％以上 （上：同年齢 下：異年齢）	96.4 (120)	A	96.7 (121)	A
					90.0 (112)	A	89.4 (112)	A
d 体づくり	・運動能力の向上 ・食育の充実	・児童の実態に基づいた瞬発力向上の取組 ・「食べることの大切さ」を理解する授業の実施（年２回）	立ち幅跳び記録 １～４年 110％UP, ５・６年 105％UP の児童の割合	50％以上	—	—	34.0 (68)	C
			「食べることは大切」と感じる児童	82％以上	98.0 (120)	A	97.9 (119)	A
e 信頼される学校づくり （コミュニティ・スクール）	・「共育」活動の充実	・地域と教職員の協働した取組の推進（委員会活動とのコラボレーション） ・会議の効率的な運営（業務のスクラップ&ビルド）	教育活動の満足度（児童・保護者）	85％以上 （上：児童 下：保護者）	88.3 (104) 95.7 (113)	A A	93.3 (110) 95.6 (112)	A A
			子どもと向き合う時間の確保（教職員）	85％以上	84.2 (99)	A	86.2 (101)	A

評価基準… A：目標達成（９５％～１００％） B：おおむね達成（８０％～９４％） C：もう少し（６０％～７９％） D：できていない（５９％以下）
目標値を１００％として，達成率を計算する。「例 目標値８５％→アンケート結果９２％ →目標値を超えているので評価はA」

F 結果の分析・解釈（中間 １０月） ○…成果 △…課題 ★…下半期の改善方策				
＜a 命の教育の充実＞ ○「主体的な児童を育てることを意識した評言に取り組んでいる。」という質問に対する肯定的な回答は91.3％であり，教職員は全体的に評言に対する高い意識を持つことができています。 △「主体的な児童を育てることを意識した評言に取り組んでいる。」という質問に対する肯定的な回答の多くは“どちらかといえばそう思う”が約7割を占めており，自信をもって取り組んでいるというためには，意識をより高めることが求められる。 ○低学年では生活科・道徳科・給食指導の成果が出ており，ほとんどの児童から肯定的な評価を得ることができた。中学年，高学年においても，おおむね肯定的な回答が得られているのは，日々の学習が命の教育につながっているからと考えられる。 △低学年でのアンケートでの聞き取りは“感じる”ことができたかどうかを問うものであり，“感じる”という言葉の概念を子どもたちがどう捉えているかという点について疑問が残る。 △中学年の命の教育における1学期までの学びが，児童の回答にどう影響しているのかは推し量ることができない。 △高学年に関しては，アンケートでの質問事項の“言葉や行動に表すことができた”という問いに対して，現段階では課題設定の段階であるため，アンケートの中での“まあまああてはまる”という回答が多くなっているものと考えられる。 ★教職員の「評言」に対するアンケート結果をふまえ，2学期から本格的に取り組む「命の教育」において，ストーリーの中で設定した評言の場をより意識した言葉かけをし，教職員間で定期的に Check・Action を行っていくことが望まれる。 また，児童の肯定的な回答は，全体的には96.2％と非常に高い結果が得られている。しかし，よくあてはまるという児童は64.4％にとどまり，自分の考えを表現できる児童が十分に育っているとは言いがたい。今後は児童の学習記録の記述から，学習活動を見直し，“言葉や行動に表すことができたか”という問いに対して“よくあてはまる”という項目を選択できる児童が増えるよう，児童が表現したくなる場の設定を工夫していきたい。	＜b 読書活動の推進＞ ○休憩時間や隙間の時間に読書に取り組んだ。 ○リブロカードでの表彰は，児童の読書のモチベーションにつながっている。 △同じ本を繰り返し読み，読書の幅が広がらない児童もいる。 △リブロカードへの記入をしない児童も少なくなっている。 △冊数カウント数は多いが，本の内容を味わうところまではいかない児童もいる。 ★第2図書室や町立図書館(検索システムも含む)を活用する。 ★読み聞かせや本の紹介などの取組を進め，環境づくりをする。 ★リブロカードの記入や読書の振り返りの時間を取り，読書の良さについて話していく。 ★期間・作者・種類などを限定しての学習を仕組んだり，委員会の「読書祭り」を利用したりする。 ★学習者用パソコンで電子書籍を読む試みを進めていく。	＜c 生徒指導体制の確立＞ ○不登校児童も縦割り班遊びに参加するために登校するなど，3年間工夫しながら継続して取り組んできた縦割り班遊びを肯定的に捉えて楽しみにしている児童が増えた。 ○5・6年生児童は1・2年生と一緒に掃除をすることで伝え方を工夫したり協調的な関わり方を考えたりするなど，高学年としての意識を高めることができた。 ○縦割り班遊びや折り鶴キャンペーンを通して，誰に対しても進んで関わろうとしたり，相手に応じてより良く関わろうとしたりする児童の姿が多く見られた。 △3・4年生児童はそれぞれの学年で掃除をしているため異学年交流が少ない。日常的な交流ができると良い。 △近接学年での交流が実施できている学年に差がある。 △行事の中でももう少し異学年で交流できると良い。 ★縦割り班活動の内容を充実させると同時に，思いを伝え合う場として振り返りを活かす。 ★6年生の委員会活動を中心として，さらに異学年での交流が深まるような活動を企画・検討中である。 ★縦割り班活動をきっかけとして他の学習や休憩時間などの交流にも繋げていけるようにする。 ★年間計画を見直して学習内容や行事等で交流する機会を意図的に仕組む。	＜d 体づくり＞ ①運動能力の向上 ○体育委員会が立ち幅跳びの記録の向上につながる運動やコツを紹介した動画を作成し全校児童が視聴し，体育の授業の準備運動に取り入れた。 ②食育の充実 ○栄養教諭と連携し，学級で食育の授業を行った。(1年・2年・3年・4年) ・食事のマナーを学習し，実際に給食で実践していた。 ・自分で豆をむくことで，豆が苦手な児童も食べていた。 ・おやつを食べ方を学び，目標を決め夏休みに実践する。 ・一口メモが効果的だった。 ★①立ち幅跳び ・体育委員会が，トッティキャンペーン企画の一つとして，体育館で分散して運動や記録会を実施することで，児童の意欲を上げていく。 ★②食育の充実 ・給食委員会で，食の大切を伝える動画を作成する。 ・一口メモで，苦手な食材を中心に，なぜ必要かなどその食材の有用性を伝える。	＜e 信頼される学校づくり＞ ○学習支援や環境整備，委員会・クラブ活動など，地域の方（サポーター）と協力して活動に取り組み，児童・教職員と地域が近い関係性を築くことができています。 △連携が一部の教職員やサポーターにとどまっているので，コミュニティ・スクールの取組紹介や学習支援の依頼，教職員によるサポーター活動への協力等，双方向のつながりを広げていくことが今後の課題となる。 ○5月には「働き方改革」についての研修を行い，その意義と目的，今年度の本校での取組(業務改善ボード，スイスイ水曜日)について全職員で共有した。職員室で退勤時刻についての話題が出てきており，意識が向上しつつある。 ○コロナ感染対策と業務改善により集まる機会を減らすため，内容に合わせて全体での研修と学年部ごとの研修に振り分けた。校務支援システムやGoogle Classroom を活用し，資料配布やアンケート集計時間等が縮小した。研修は，夏季休業を利用して行い，授業日の「児童と向き合う時間」を確保した。 △会議時間の短縮 ★コミュニティ・スクールについて，児童や保護者に周知する。 ★学校だよりで，現在連携している活動を紹介して保護者や地域，サポーターの方々と共有し，児童とサポーターが一緒に取り組むアイデアを実践していく。 ★Google Classroom をさらに活用し，授業づくりや分掌の仕事に役立て，効率化を図る（Classroomでの教材共有。授業の中でワークシートや作品を撮影・提出させ，評価に役立てる。等） ★スクラップできない行事と，縮小・削減できる行事を整理する。 ★会議は，協議するポイントを絞って提案できるよう下準備する。



F		結果の分析・解釈（最終 2 月）		○…成果	△…課題	★…来年度に向けた改善方策			
< a 命の教育の充実 > ○「主体的な児童を育てることを意識した評言に取り組んでいる。」という質問に対する肯定的な回答は 96.3%であり、前回より数値も上がっており、評言に対する意識は高まり、かつ持続できている。また“そう思う”の割合が前回の 2 割から 4 割へと向上していることは、少しずつではあるが評言の重要性が校内に浸透しつつあると捉えることができる。 △自信をもって取り組んでいるというためには、研究によりなどで評言の具体を可視化し、継続して啓蒙することが必要であると考えられる。 ○児童全体をみると、おおむね肯定的な回答が得られており、前回と大きな数値の変化は見られなかった。その点では命の教育そのものは充実していると思える。 ○2 学期の低・中学年の回答の結果は高い数値を示していた。高学年では特に 6 年生の肯定的回答の数値が向上しており、命の教育の学習が進んでいることの結果と考えられる。 △全体を通しての課題として、「他者の意見や考えを受け止め、自分の考えを表現できる児童」を育成するために、命の教育にどのように取り組んでいくのかという点で、学校全体での共通認識が不十分であったといえる。目標の達成度を推し量るためのアンケート項目の再考が必要であるといえる。 ★研究推進部が中心となって、「評言」活動の実践を学年部ごとに共有する機会をもつようにする。そうすることで、児童の成長をふりかえると共に、有効な評言の検証が可能になると考えられる。また、年度末までに、各学年で命の教育ストーリーとループリックの見直しを行う。その上で今年度の命の教育の成果と課題を明らかにし、次年度の命の教育のループリック作成方針を明らかにする。		< b 読書活動の推進 > ○「読書郵便」や国語科の学習と関連した読む場の設定（並行読書）により、読書の幅が広がるとともに、長い物語の本を読むようになってきた。 ○紹介カードを書くことで、目的をもって読書する機会を得ることができ、その際は読書量が増えた。 ○「読書祭り」等の活動に積極的に参加するなど、1 学期より読書に意欲的な姿が見られた。 ○多くの教科と関連させて、本を使って進んで調べ、必要な情報を見つけることができた。(3 年) ○電子図書の利用を試行した。図書室に行かず、様々な本が読めるところが良かった。 △本を読んでいるがリブロカードに記入していない児童が多いように思えた。 △クラスで読書郵便を行う時間が持てなかった。 △同じ本や同じシリーズばかり読んでいる児童がいた。 △雨天の休憩時などに学習者用パソコンを使う児童が増えたことで、進んで読書をしたという意識が減ったように思う。 ★リブロカードの記入について読書前に声かけするなど記入まで見届け、読書意欲を喚起できるように活用する。 ★色々なシリーズの本を読むように声かけを継続して行い、読み聞かせなどを通して、新しい本との出会いの場を設ける。 ★教科と関連した並行読書を継続していきたい。 ★たてわりを活用した「読書郵便」の取組を委員会で計画し、読書の幅を広げる一助としたい。 ★電子図書の活用を目指していきたい。		< c 生徒指導体制の確立 > ○挨拶運動や縦割り班活動が同学年や異学年と協調的に関わったり協力し合ったりする良いきっかけとなっていた。 ○1・2 年生間でおもちゃフェスティバル、5・6 年生間で委員会活動に向けた交流等、学習や児童会活動を生かした交流の場を設定し、協調的な関わりが多く見られた。 △パブリックを効果的に活用し近接学年でしっかり見合って良さを伝え合ったり、それぞれの学年への評価やメッセージを掲示して見える形にしたりする等、工夫が必要だった。 △3・4 年生間で学習を生かした交流が設定できていないので今後設定できると良い。 ★児童主体の近接学年との活動や交流を通じて児童に憧れや具体的イメージを持たせられるような機会を設定する。 ★3 年生が総合的な学習の時間に作成したカルタを縦割り班遊びで活用する等、学びを全校での交流へつなげられないか年間計画を見直しながら検討する。 ★来年度に向け、執行部を中心に縦割り班活動と今年度の新たな取組を計画的に位置づけ、児童の絆をさらに深められるようにする。		< d 体づくり > 【運動能力の向上】 ○1 学期に引き続き「腕振りスクワット」を体育科の学習導入時に、準備運動として行う取組を継続して行うことで、筋瞬発力及び筋持久力に係る運動能力の向上に努めることができた。 ○体育委員会で運動チャレンジを企画し実施した。 △立ち幅跳び 記録の測定実施（2 回目） 1 学期の記録よりも伸びた児童の割合は、6 割を超えているが、目標の伸び率を達成した児童の割合は、2 学期時点で 34%と評価目標には届いていない。新体力テストの結果を見ると、反復横跳び、50m 走が男女とも全国平均、県平均を下回っており、立ち幅跳びは男子が全国平均、県平均をわずかに上回り、女子は下回っている。この結果から、本校児童は、瞬発力に課題があり、日常的に取り組める立ち幅跳びを重点目標に取り組んでいる。今回の結果は、測定時の気温の低さも一つの原因と考えられる。1 年間を通しての目標なので、3 回目の測定で、目標を達成できるように、引き続き取組を継続していく。 【食育の充実】 ○栄養教諭と連携し、学級で食育の授業を行った。(全学年・ひまわり)授業の流れや教材の工夫で、興味を持って参加する児童が多かった。また、学習で学んだことを、生活に生かす児童も多く見られた。(例 栄養バランスを考えた朝食づくり) ○給食委員会の活動として、児童が、食べることの大切さに興味・関心をもてるような活動を行った。 ・「まごわやさしい」紹介映像の作成と放映 ・「まごわやさしい」クイズ ・給食標語募集、表彰 ・栄養ボードに献立、3 大栄養素、給食標語を書く。 ○給食一口メモの活用 以上の取組を通して、「食べることが大切」だと感じる児童の割合が、目標を大きく超えることができた。 【運動の力向上】 ★3 学期は、「正しい立ち幅跳びの方法」を紹介する動画を視聴し、立ち幅跳びの運動を体育の準備運動に取り入れる。 【食育の充実】 ★5 年生の 2 回目の食育の授業を行う。 ★全国学校給食週間の取組を、給食委員会で行う。 ・ひろしま給食 1 0 0 万食メニューに選ばれた本校児童の紹介 ・地産地消給食の紹介など ★引き続き、給食一口メモの活用をしていく。		< e 信頼される学校づくり > ○HP や学校だよりでコミュニティ・スクールのサポーター活動の様子を発信し、周知するようにした。 ○PTA とサポーターが協力し、「謎解き探検」などのイベントやパブリックデーなど学校行事の支援をしていただき、児童・保護者とサポーターがより身近になった。 ○2 学期は行事が多く、学校生活に張りを感じられたことや友達と多く交流できたことで学校は楽しいと感じる児童が増えた。 △学校が楽しくないと答えた児童の主な理由として、「面倒くさい」「友達がいない」「勉強が嫌い」が挙げられた。 △教育活動などに積極的に参加したいと考える保護者は 74.7%で、1 学期の 79.3%より減った。そう思うと答えた親は 14.3%で非常に少ない。 ○△業務改善ボードの貼り忘れを無くし、楽しみながら取り組めるよう工夫した。貼り忘れは減ったが、目標達成には課題がある。 △企画運営委員会の前に、起案事項について担当と管理職で打ち合わせたり学年主任に確認したりすることで、協議するポイントを絞り、会議時間を短縮した。複数の会議をまとめて行い、教員が児童と向き合う時間を確保できるよう努めた。 ★コミュニティ・スクールのサポーター活動の様子を引き続き発信する。入学説明会やPTA行事で、事務局からコミュニティ・スクールの良さを話してもらう。 ★研究部、生徒指導部の取組の工夫、サポーターの活用等で、学習支援や児童同士の交流を推進する。 ★行事を立案する際、スクラップできない内容と、縮小・削減できる内容を整理する。(企画運営委員会で協議)	
< 学校の大きな方向性に照らして > コミュニティ・スクールを基盤とした「共育」の理念のもと、地域に根ざした「命の教育」の充実を図ることで、「生きる力（自ら課題を見付け、学び、考え、判断・行動し、明るい未来を共に創る）」の育成を目指す。									
< 学校運営協議会委員による評価 > ・目標・方策・設定の適切さ（A）・評価（結果）の適切さ（A）・分析・解釈の適切さ（A）・改善方策の適切さ（A）→ 総合評価（A）									



学校関係者評価を受けての改善方策（修正）
< 学校の大きな方向性に照らして > 今年度の学校自己評価に対して、学校関係者では、全体を通して「A：適切である」との評価であった。 本校の今年度一番の育ちは、「命の教育」を柱とした児童の主体的な学びの姿であり、それを促し引き出すことを意識した教師の評言であったと考える。今年度作成した評言に関するループリック（評価計画）を、次年度はより活用しやすく、児童と教師に浸透するように検証と改善を行っていく必要がある。また、「命の教育」を柱として各学年や各部の取組を横断的につなげ、取組の質を上げるなど組織的な学校運営を行っていきたい。本校のコミュニティ・スクール運営やサポーター活動は、地域や保護者が主体的に動いておられることが強みとして挙げられる。このことと、これまで取り組んできた「命の教育」をさらに連携、充実させていくことにより、次年度も学校教育目標の実現と「共育（共に育つ）」の具現化を目指す。

